

次の企業と FIVE STAR MAGAZINE は士業界を応援しています。

Powered By
ご協賛企業



NOTHING IS
impossible



**THE GREAT
ROCK 'N' ROLE
SWINDLE**

Who killed
MR. KOMON

特別企画
士業事務所
事務所規模
RANKING
2025

誰が顧問を
殺したか?

特集

オオノオ!!

連載

“I can't believe
ChatGPT
can do this!”

こんなことまで できるなんて!

取材/セブンセンス税理士法人(東京都港区)
ディレクター 公認会計士・税理士 大野修平氏

第3回 取材日

2025.02.09

このまま ChatGPT が進化すれば、士業を始めとするホワイトカラーの仕事は奪われていく——!? そのことに危惧を感じた我々は、“税理士業界における ChatGPT の第一人者”大野修平氏とともに、ChatGPT の進化の動向をウォッチしていくことにした。ChatGPT の進化は止まらない。それどころか早まるばかりだ——

オオノオ!! なんてこった!!

(文・武田司、GPT o1 pro)

AIは人間よりはマシな答えを出す

—先日、「AIは脅威か救世主か!?’というセミナーで対談をされていましたよね? 私にとって差し迫った脅威だったのは、機能や仕様の突然の変更とサービスの停止です。先日、ChatGPTの「キャンバス」を使って仕事をしようと思ったら、キャンバスがなくなっていて、焦りました。

大野:キャンバスは残っていますよ。インターフェースがいろいろ変わるので、見かけ上なくなったように見えますが、アクセスする箇所が変わっただけで、機能としては残っています。

—今月は、文字起こしに使っていたLINEの「Clova」のサー

ビスが終了すると言われ、びっくりしました。後継サービスの「LINE WORKS AiNote」の機能やインターフェースがほとんど同じだったので安心しましたが、突然の仕様変更やサービス停止は脅威に感じます。

大野: 今は、AIサービスの過渡期なのだと思います。例えば、昔は文章作成用のアプリがたくさん存在していましたが、結局今はWordとGoogleドキュメントの2つが主流になっていますよね。そのほかのアプリでも、数多くの製品が生まれては消えていきました。

だから、ある程度は仕方のないことだと思います。

AIでも今後しばらくは「雨後のタケノコ」のように多くのサービスが生まれては消えていくと思いますが、最終的には2つか3つに集約されていくと思います。

だから、今後どうなるかは分かりませんが、今のところはChatGPTやGoogleのGeminiなど、勝ち残りそうなものを使っておけば大外れはないだろうと思います。

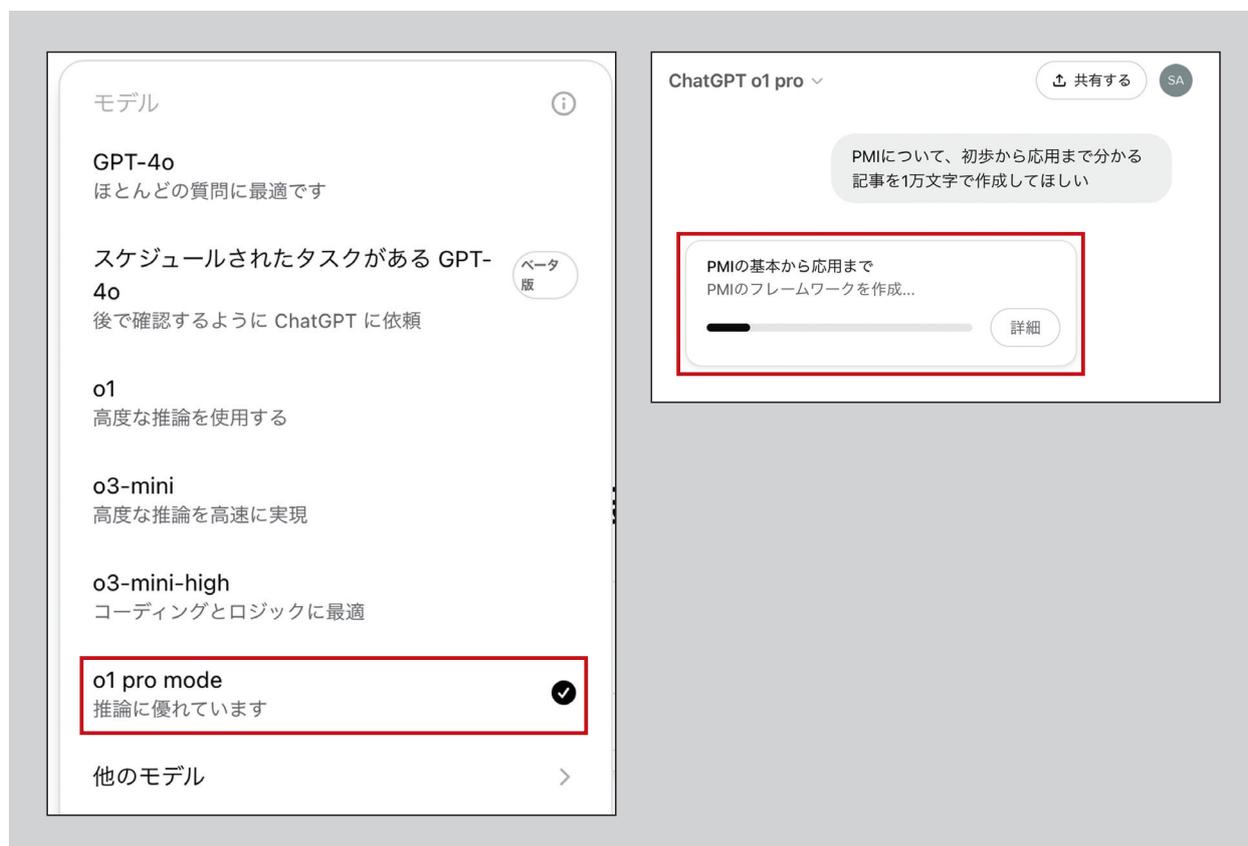
—そのChatGPTですが、大きなトピックは「Pro

mode」の搭載ですね【写真左】。

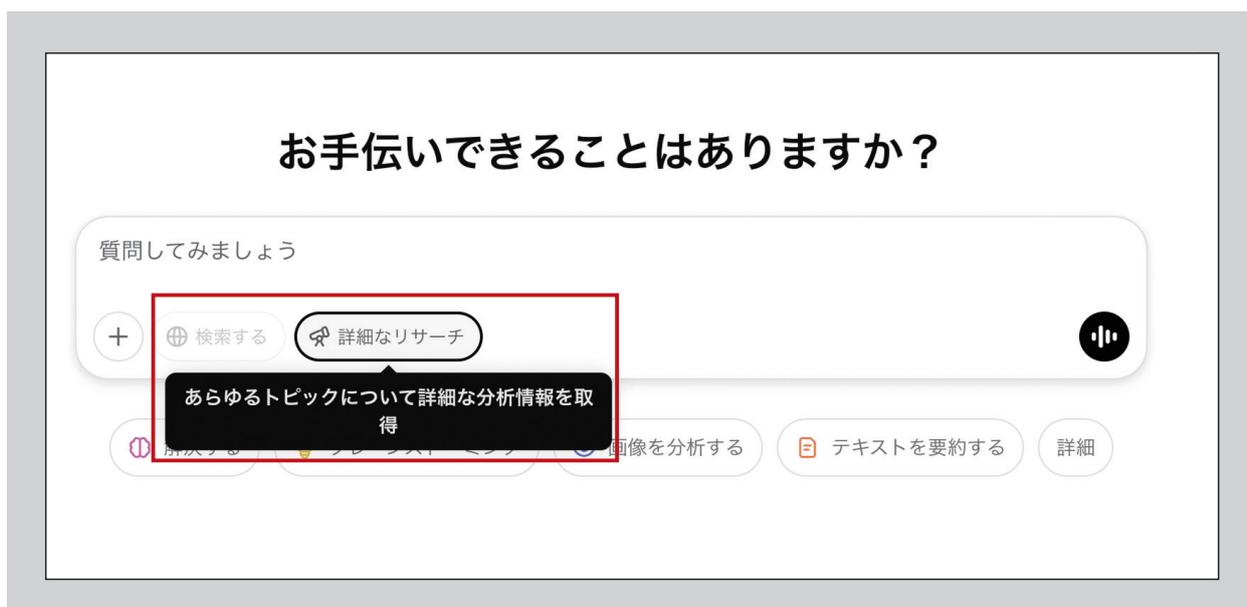
大野: Pro modeはかなりすごいですよ！もう文章を「書く」とかいう次元ではなく、教師のような存在です。例えば、M&A後の統合プロセスにPMI (Post Merger Integration) というものがあります。そのPMIについて、「初歩から応用まで分かる記事を1万文字で作成してください」とPro modeに伝えると、熟考した上で記事を作り上げます【写真右】。ちょっとやってみましょうか。

Pro modeで生成すると、内容も非常に正確で、言葉も自然で、修正しようとする、むしろこちらの誤りを指摘されるようなこともある。だから、こちらはPro modeの邪魔をしないようにジッとしていないといけません(苦笑)。

そもそも「o1 (オーワン)」というモデルが推論モデルで、ものごとを筋道立てて考えるのが得意だったのですが、Pro modeはそれをさらに上回るモデルなので、さらに深くまで思考することができるようになっていま



お手伝いできることはありますか？



す。だから、私は今は普段の仕事はスピード感のある「4o（フォーオー）」で行って、難しい仕事は「o1 Pro」を使っています。

—使い分けをするのは、利用などに制限があるからですか？

大野：いいえ、単純に処理時間が違うからです。o1 はとっても真面目なので、じっくり考え込みます。4o はもっと気軽に答えてくれますし、Web 検索ができたり、PDF を扱えたり、いろんなことができます。

—使い分けが必要になるのも、過渡期だからなのかもしれないですね。

大野：あ、今、Pro mode で記事の作成が終わりましたよ。約6分ほど考えて、1万文字ほどの原稿が生成されました。

Pro mode にも「Deep Research」が搭載されましたので、複雑なオンラインリサーチや解析なども自動で行うことができます

【写真】こうなってくると、本当にAIエージェントとかAIアシスタントのように使えます。リサーチや解析には時間がかかりますが、その間に食事に出たり、タバコを吸ったりしていても、仕事は進んでいきます。

—すごい進化ですね。この連載だって、まだ3回しか続けないのに…。

大野：そうですね。想像を超える進化のスピードです。2024年時点では、生成AIは感度の高い人が使うものという感じでしたが、これからはどんどん業務に導入されていくこと

でしょう。

例えば、弊社では毎週社内テストを実施しているのですが、そのテスト問題は今、試験委員が生成AIで作成しています。

—こうやって毎回、大野先生がAIを使っているところを見ると、ChatGPTがとても賢く感じられます。しかし実際に、自分で使ってみると「なんておバカなの」と思う場面も多々出てきます。それはなぜなのでしょう？

大野：使い方の問題もあるでしょうし、求めているレベルが高いというのものもあるかもしれませんね。

—文章作成という仕事は正解がないもので、曖昧でもよい場面もあるから、AIを使いやすい面があると思います。しかし、税理士さんや他の士業のように、正確さが重視される仕事だと使いにくいところがあるのではないのでしょうか？

大野：現時点ではそうですね。いわゆる「正解がある世界」の究極は数学だと思いますが、すでにChatGPTのo1モデルなら東大の数学の入試問題を解いてしまいます。

執筆やコンサルは答えのない世界ですが、税務は数学とそうした答えのない仕事の間に位置していると思います。ですから、確かにAIが処理するのは難しそうに見えますが、そこは人間にとっても難しい分野なわけですよ。

裁判官でさえ判断を謝ることがあります。そういう世界だからこそ、生成AIがなすべきことは「正解を出す」ことよりも、「人間

よりはマシな答えを出す」ことなのだと思います。そういう時代はやってくるでしょうね、おそらく。

経営の4要素 「ヒト・モノ・カネとエーアイ」

一 「人間よりもマシな答え」という意味では、うまく取り入れているのが将棋の世界ですよ。

大野: あれは厳密には生成 AI ではなく、古いタイプの AI なので微妙に文脈は異なりますが、そこにはヒントがあると思います。

将棋ではすでに、AI のほうが人間よりも圧倒的に強いですよ。プロ棋士たちは誰も AI に勝てません。それでも多くの人は人間が将棋を指すのを見ますよね？ ウサイン・ボルトは 100 メートルを走るのに 9 秒以上もかかるわけですが、それでも走る姿を見て感動していますよね？ イアン・ソープだってイルカよりはるかに泳ぐのが遅いのに、レースを観戦して興奮しています。

一 たしかに、AI は正解に近い答えを導き出しますが、そうではないものを求める場合に、AI には難しいものってたくさんありますね。小説や映画だって、捉え方や面白さは人それぞれですからね。

大野: それって何かと言うと、私は「経験」だと思っています。

例えば ChatGPT に「頭が痛い」と言うと、いろいろ心配してくれますが、今読み飛ばしたくらいに言葉が響きませんよね【写真左】。なぜ響かないかと言えば、ChatGPT は頭が

痛くなったことがないからです。分からないのに心配されても響かない。

だから、経験なんですよ。ChatGPT は膨大な量の学習はしていても、経験はしていない。経験してないから、全く響かない。

これはビジネスの世界でも同じで、答えのない領域、例えばコンサルティングでも、ChatGPT がさまざまな施策を示してくれるかもしれませんが、結局それらは刺さらない。生成 AI って、言っていることは正しいかもしれませんが、どこか白々しく聞こえてくるんですよ。

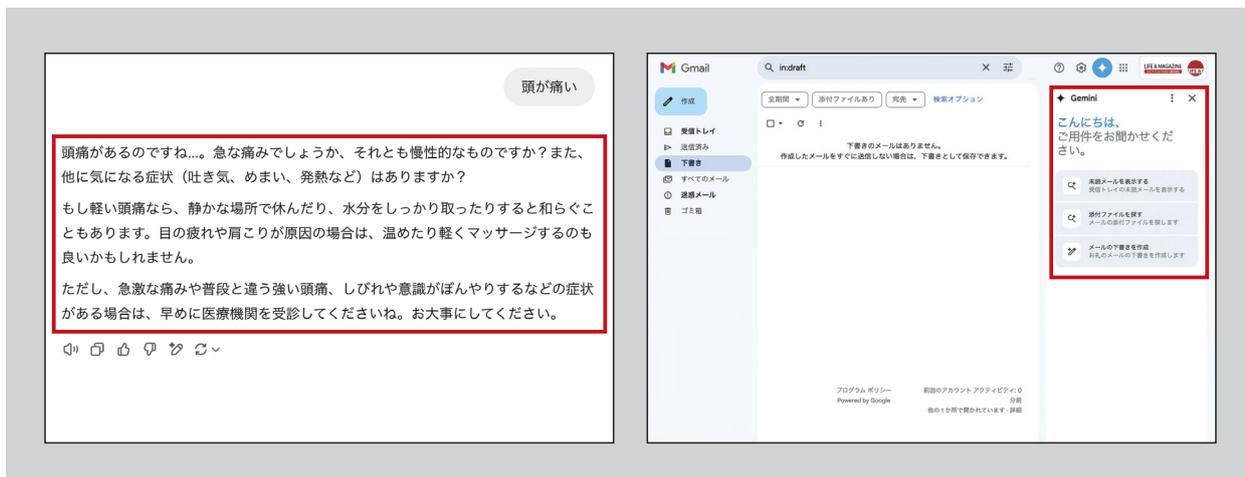
一 つまり、それは理解と共感の問題なのでしょうね。

大野: そうですね。ただ、一方で「AI によって、私たちは考えることを手放しつつあるのでは？」という声も確かにあります。私もこれについては結論が出ていないのですが、「もう人間は考えなくてもいいのかな？」と思う時もあります。

でも「人間は考える葦」だと言う人もいるくらいだから、考えることが人間の本質のような気がする。でも合理的・客観的に考えることは、生成 AI のほうがはるかに得意です。

逆に人間は非合理に考えたり、偏った視点を持ったりすることが得意です。従来はそれが短所のように言われてきましたが、これからはそれが長所になるのではないかと私は思っています。

「それって、あなたの感想ですよ」という言葉には「それは非合理的ですよ」とか「ソースに乏しいですよ」というニュアンスが含まれていますが、逆にそれこそが価値をもつ



セブンスセンス税理士法人

(東京都港区)

公認会計士・税理士、ディレクター
大野修平

大学卒業後、有限責任監査法人トーマツへ入所。金融インダストリーグループにて、主に銀行、証券、保険会社の監査に従事。トーマツ退所後は、資金調達支援、資本政策策定支援、補助金申請支援などで多数の支援経験を持つ。また、スタートアップ企業の育成・支援にも力を入れており、各種アクセラレーションプログラムでのメンタリングや講義、ピッチイベントでの審査員や協賛などにも精力的に関わっている



時代が来るのかもしれないと感じています。

—私は多くの経営者の話を聞きますが、取材の後には必ずあの考え方ややり方は有効なのかなって考えます。

大野：結局、経営の世界には「正しさ」は存在しないですね。私がコンサルをしているいつも思うのは、理論はいろいろあっても、最終的には「実行力があるかどうか」「やり切れるかどうか」にかかっているということです。

実行できるかどうかは必ずしも合理性や客観性が重要ではなく、むしろ非合理的で主観的な考えや情熱、こだわりや執着に重点があるような気がします。「これが私の考えだ」と言ったときに、「それって、あなたの感想ですよ」と否定されても、「そうですよ、これが私の考えだからこれをやるんです」と言えることに価値がある。これから、そうした非合理的な判断が、価値を持つようになっていくのかもしれない。

—これまでの連載回と違って、今回は初めて「結局、世界は変わらないんだ」と感じますね。結局、生成AIについてもツールでしかない。

大野：そうですね。まさにそうだと思います。そして、それを受け入れられるようになったことが、バージョンアップしている証拠ですよ。

あとは、これをツールとして使いこなせるかどうかです。

2025年からは、GoogleWorkspaceに

Geminiが搭載されています。例えばGmailを開くと、Geminiがアシスタントのように手伝ってくれます【前ページ写真右】。Geminiに「ここ3か月分のメールをチェックして、緊急度と重要度で分類して、早めに対応すべきものを教えて」と言うと、サッと提示してくれます。

—本当ですね、Geminiがある！

大野：スプレッドシートにもGeminiがあるので、関数を教えてもらえるし、Googleドキュメントを開けばChatGPTのキャンパスのように使うことも可能です。

結局は使い方次第です。いろいろな使い方を調べて取り入れてみるのもよいですし、自分で試行錯誤しながら使ってみるのも面白いと思います。

—これまでの経営は「ヒト・モノ・カネ」の3要素でしたが、これからは「AIをどう使うか」が経営の一要素になっていくでしょうね。さっき大野先生は「40ちゃん」と呼んでいましたが、AIにもそれぞれの特性や個性があって、それらを使い分けていくスキルが必要になりそうです。

大野：そうですね。40はフレンドリーでレスポンスもいいので「ちゃん」なのです。でも、o1 proは恐れ多くて「ちゃん」とは呼ばれません。「教えて、Google先生」ではないですが、o1 proはまさに「先生」とか「教授」といった存在です。

—今回も勉強になりました。ありがとうございました。■